

東日本大震災による被害が少なかった仙台市中心部 肴町婦人会の共助に対する研究

The study for the mutual assistance of the Sendai-shi center Sakanamachi women's society where there was little damage by the East Japan great earthquake disaster

○北村美和子¹

Miwako KITAMURA¹

¹ 東北大学大学院工学研究科 都市・建築学専攻

Department of architecture and building Science, Graduate School of Engineering Tohoku University

Then the eastern Japan great earthquake disaster that occurred on March 11, 2011, there were areas where Miyagi prefecture was seriously damaged by earthquakes, tsunamis, and fire. However, in the center of Sendai city there was little direct damage, but there were many people who evacuated from home due to the break of the lifeline and the increase of difficulty to return home. The association and the women's association supported this people. This study is a study of the activities of the Women's Association immediately after the disaster with an example of cooperation by the Women's Association of Sendai-shi Aoba Ward

Keywords: The Great East Japan Earthquake, social capital, grass roots activity, women's associations, Sendai city

1. はじめに 研究の目的と背景

2011年3月11日東日本大震災の被害は甚大、かつ広範囲に及び、岩手、宮城、福島3県において津波波害に見舞われた沿岸部等多くのメディアに取り上げられた。全世界に東日本大震災の津波による災害状況が発信され、国内外から救援物資が届けられた。

このような状況下、仙台市中心部の青葉区大町地区や立町地区付近は、3月11日には震度6弱、3月28日には震度4の地震があったが、内陸部であり津波被害もなく、沿岸部と比べると被災報道は少なかった。

仙台市内の避難所は、東日本大震災によって想定以上の多数の避難者を受け入れなければならない状況になった(図1)。その中には、交通機関が停止したため、帰宅困難となった人が多く含まれていた。

発災後、一斉に帰宅を始めた通勤・通学者の多くは、JRの在来線と新幹線が全面運休となったために交通手段を失った。このため、避難所に行く帰宅困難者が増大した。

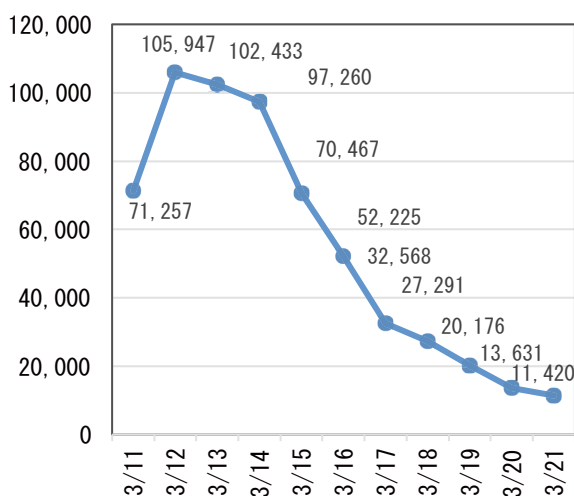


図1 2011年 東日本大震災 仙台市 避難者数 (人)

このような混乱時に、町内会などの地域住民による共助が大きく働き、帰宅困難者、被災者への炊き出しや保護などを行った。本研究では、仙台市中心部の肴町婦人会の発災時の共助を研究し、記録することにより今後の防災の一助とする。

2. 先行研究

地域コミュニティの社会的資本と災害についてアルドリッチ¹⁾は地域コミュニティの繋がりが強い地域について、社会資本があり災害からの復興が早く行われるとしながらも、コミュニティから外れてしまった社会的弱者は災害により、一層阻害されるとしている。社会資本を持たない人々には情報が的確に伝わらないため支援援助の供給が遅くなるといった研究が行われている。

地域コミュニティの強さと災害からの復興についてはハリケーンカトリーナ以降、多くの研究がなされている。

東日本大震災における地域コミュニティ研究の中でも、女性の炊き出しについて調査を行った堀²⁾は、実際に炊き出しを行った人々の課題について焦点をあて、炊き出しを行った女性自身の負担感をはかる研究を行った。そして女性は炊き出しを「させられた」と捉えているのではなく、特に自発的に参加した人の場合は、自らの居場所や仕事を求める気持ちの方が大きかったことが明らかになった。

災害とエンパワーメントに着目した新海³⁾の研究では、地縁組織や子ども会・婦人会・老人クラブ・PTAなど主要な中身とする、地域のエンパワーメントを地域生活の社会的側面に注目し、憲法・教育基本法、まちづくり・地域づくりをデザインし、それを実行できる住民の自治能力を育成できる住民の主体形成の重要性について、神戸の丸山地区を一例とし、阪神淡路震災の被害を最小限にとどめたということを示した。

このように地域コミュニティと災害からの復興するコミュニティの力(レジリエンス)についての研究は多く存在するが、東日本大震災の大災害時にも関わらず被害のほとんどなかった宮城県仙台市中心部の婦人会の行動についての研究はあまりなされていない。

3. 肴町と御譜代町の歴史的背景

御譜代町とは、仙台市中心部の青葉区大町周辺エリアの総称である(図1)。伊達政宗による仙台開府から城下町として栄えてきた。

御譜代町商店会は、御譜代町である大町・肴町・立町・元柳を地域自治体範囲として、サービス業をはじめ不動産業、建設業、製造業等の会員で構成されている商店会である。御譜代町商店会のなかでも女性が中心の婦人会は「肴町婦人会」と呼称されている。

歴史の長い地域のために多くの住民が40年以上同じエリアに居住しており、中には100年以上の歴史がある家なども存在する。

祭り事への協力や地域向上活動への協力、自転車の安全指導や食のイベント、自衛団の夜回り活動など震災以前から地域コミュニティ活動の多い地域であった。



図2 仙台市御譜代町 案内地図

このような背景から東日本大震災の発災害直後には御譜代町地域のコミュニティの人々が自発的にボランティアを始めた。

なかでも肴町婦人会の行動は早く、発災日の夜から炊き出しをはじめた。

4. 肴町婦人会の発災時からの活動

肴町婦人会が行った主な支援活動は炊き出しであった。発災当日は気温が低くライフラインも止まり、御譜代町商店会の役員は発災直後から温かな食べ物を皆に配ろうと話合っていた。電話での連絡が出来なかったために発災当日の炊き出しは役員が自転車で声掛けを行い、老舗蕎麦屋の店先で行われた。

その後およそ7日間にわたり自転車屋や老舗蕎麦屋の店先、仙台市戦災復興記念館などで炊き出し活動を行った。婦人会ではこれらの炊き出しを行うために食料の調達をし、民生委員による要望で高齢者や身体障害者への食事の運搬も行った。

また婦人会だけでなく御譜代町商店会は、震災後ライフラインが途絶え町中が真っ暗になると、地域住民に不安の声があがったため、地域の人々が安心・安全に過ごせるよう自警団を組織し、仙台市青葉区西公園を中心に夜回り活動を行った。

東日本大震災から6年が経過した現在、婦人会のメンバーに発災時の聞き取りを始めると、大半の人々がすでに明確な記憶がないと言う人が多かった。このため現在聞き取り調査をしておくことが急務であった。

仙台市御譜代町のような、地域コミュニティの活動が活発な社会資本を持つ地域において、東日本大震災発災

時に自然発生的に助け合い共助が行われた。その一例として日本語が流暢でなく地震の経験のない留学生を一時的に自宅に避難させ面倒を見た人々もいた。

5. 調査方法

発災時の炊き出しの状況などについて2017年6月7日、6月13日の2日間、肴町婦人会主要メンバー21名に聞き取りを行った。炊き出し終了から6年が経過した時点での意識や捉え方となる。

6. 炊き出しの意義

発災後テレビや新聞の情報が入ってくると、同じ宮城県でありながら、被害がほとんどなかった肴町婦人会の人々は「申し訳ない」と言う気持ちに苛まれたようだ。このために自分達がなにか出来ることをやらないといけないという大きな使命感があったという。また被害が甚大であった被災地に親戚縁者がいる人々もいたが、発災後すぐには被災地までたどり着くことができず、もどかしさや不安な気持ちであったため「炊き出し」をすることにより自らの存在の意義や被害がなかったことへの罪悪感から少しでも逃れることができたという。

また、その緊急時に声掛けをして集まるといった集団行動により、安心感を得ることができたと話していた70代のお年寄りもいた。「炊き出し」の話をする事で当時忘れていた記憶がよみがえることもあり、このような話を婦人会でまとめておくべきだったという意見もあった。

(1) 炊き出しで見えてきた発災時の問題点

Aさんによると食料を集める上で最も困ったことは、食材を自ら調達するにあたり、震災後、食料価格が急騰していたことであった。

多くの婦人会のメンバーが想定していなかったことが帰宅困難者の存在である。もともとは近所の人々のために始めた炊き出しであったが、御譜代町が仙台中心地であったために、帰宅困難者の炊き出しをすることになった。このために近所の人々のために用意した食事が近所の人々へ十分に配分できないといったことが発生した。

Bさんによると炊き出しをしていたときに一番困ったことは水の不足だった。

Cさんによると、20年くらいでマンションが増えて町内会に入っていない人も多く、新しい住人との接点がないこともあり、炊き出しの食料を配膳している時に感じたのは、炊き出しをしている人々は顔見知りだがもらいにきている人は見知らぬ人が多かった。

Dさんは全部で5日間ほど炊き出しに参加した。炊き出しではみそ汁をつくったり、ゆで卵をつくったりした。炊き出しで困ったことは、ガスが止まっていたために石油ストーブでお湯を沸かしたが、火力が弱くなかなかお湯が沸かなかったこと。食材を手に入れるのがとても難しく配膳した食事に偏りができてしまったこともあった。夜間、電気がなく、真っ暗なのは本当に怖かった。部屋中を明るくできるくらいの懐中電灯を常備しなければいけないと思った。

Eさんは40年以上この地区に住んでいる。発災時に、まず近所のお年寄りのことをとても心配した。炊き出しでは材料の確保の担当で食料が見つからずとても大変だった。元々仲良しの婦人会だったが震災の時は町内が一丸となって炊き出しや避難者の方々の支援をした。普段から仲良しなので、高齢者や援助が必要な人の家はだいたいわかっており、安心できる。また同じような状況になっても皆と一緒に炊き出し支援など参加したい。

このような証言から、ライフラインの停止により、治安への不安や水不足、町の中心部でも食料の確保が困難であったことがわかる。前日まで100円だった大根を1,000円で販売した店や、おにぎり2個程度を1,000円で販売していたところもあったそうである。

炊き出しの食材の確保のため、肴町婦人会は、知り合いから食料を分けてもらったり、飲食店経営をしているメンバーが冷蔵庫などに備蓄してある物を供出したりして、炊き出しに使った。

もともとは近所の人のために始めた炊き出しであったが、予想以上に帰宅困難者が多かった。帰宅困難者が、特段に感謝の様子を見せることもなく、当然のように食べていくことに困惑もした。近所の顔見知りの人達に食べてもらえなかったことへの後悔の気持ちを話す人もいたが、炊き出しを行う上で人を選別することはできないので仕方ないと言う意見が多かった。

(2) 炊き出しのなかにみえる災害ユートピア

ソルニット⁴⁾は著作「災害ユートピア」の中で、戦争や災害で生き抜いた人々の間にグループへの連帯感が生まれ、物質的・心理的な援助と安心感の大きな源となると述べている。東日本大震災を体験した御譜代町の地域住民は、「災害ユートピア」の状況下にあり、肴町婦人会の「炊き出し」をはじめ、自衛団の組織、留学生への援助など、ボトムアップ式の災害対応が自然発生した。

Fさんによると、食料を自宅で煮炊きし、炊き出し会場まで持って行った。この日まで炊き出しの経験がなかったので、とにかく何でも出来ることをしなくてはと思い、暖かいものをたべてほしかった。無我夢中で行動していたため、ほかのことはあまり覚えていない。この町内会の良いところは多くの人が30年以上住んでおり顔見知りであるため、呼びかけがあればすぐに協力して集まることができることだ。

Gさんは食料品店を営んでいたため、震災後、店の片付けで精一杯で炊き出しに参加することはできなかったが、店の商品を提供した。発災時には団結力のある良い町に住んでいて良かったと思った。発災直後、停電で暗くなった店の中に人々がなだれ込んできて恐怖を感じた。翌日から知人を頼り仕入れをして、皆のために頑張って商売を始めた。なるべく老人ホームや施設の人々に優先して食料品を売るように心がけた。とにかく休む暇がないくらい働いたのでぐったりしたが、多くの人に、食料を売ってくれてありがとうと言われ、疲れもふつとんだ。4年くらいたってから、そのときの人があの時は本当に助かりました、有り難うと言って、当時まだ赤ちゃんだった娘さんと、お店に来てくれたことがとても嬉しかった。商売をして頑張って本当に良かったと思う。残念なことは帰宅避難者の方が多く集まってしまい近所の方に食事が届かなかったこと。

Hさんはこの地区に50年以上も住んでいるため普段から婦人会の会合にも良く参加していた。発災時には、カレーライスと豚汁を作った。暖かい食事を配ることができて本当に嬉しかった。本当に寒い日が続いた。震災前と後では家庭の事情で引っ越しなどがあり、人数が減ってしまい寂しくなった。災害を乗り越えて婦人会は一層団結力を増したと思う。そして、もしまた災害が起きたら炊き出しなどの支援を皆で行いたいと思う。

Iさんも同じように40年以上もこの地区に住んでおり、日頃から婦人会に積極的に参加してきた。発災後、役員の呼びかけで炊き出しに参加しカボチャの煮物を作りました。この町内はまとまっていて協力的で、安心できる。同じようなことが起きててもまた炊き出しなど頑張って参加したいと思う。一番嬉しかったことは、福島から戦災復興記念館に避難していた人々がいて、その人々に喜んでもらったこと。いつも回覧板をまわしているので、高齢者や援助が必要な人がどこにいるのか把握していたのでその人達に食事を届けることができた。

Jさんは多くの職員をかかえていて町内の炊き出しには参加できなかったが、自分の会社の職員に対して炊き出しをしていた。炊き出しを町内で行うと聞いたが、自分の会社の職員の世話をすることで手一杯だった。

この震災の後、町内会で備蓄用食品や自家発電機などを購入したので少し安心している。この町会の皆さんは自分のことを全て後回しにして、避難してきた人のために一生懸命働いていた。また同じようなことが起きてても皆で力を合わせて頑張って行きたいと思う。この婦人会は年に5回以上も行事があり、いつも参加しているのでいろいろな情報が入ってくる。災害時にもこの情報が色々役に立った。他の地域より被害が少なく、今でも申し訳ない気持ちで一杯だ。避難してきた方々にどのような支援をしたら良いのかを指導してくれる人がいたら助かったのだが。

Kさんは不動産業を営んでいるので入居者の安全を第一に考えて無我夢中で数日をすごしていた。当時の記憶はあまり残っていない。1人では何も出来ないが婦人会のみんなで助け合ってなんとか乗り越えることが出来ました。震災前から仲が良かった婦人会ですが震災後はより一層思いやりが深くなったと思う。

Lさんは約40年この地区で暮らしているが、震災の一年前に高齢の両親を引き取ったばかりで、震災が起きた時は途方に暮れてしまい、自分の家族のことで精一杯だった。そのために炊き出しに参加出来なかった。食料を探し、娘と何時間も歩いたのを覚えている。参加出来なかったことを、今では申し訳ないと思っていますが、どうしようもできなかった。

コメントを紹介したAさん～Lさんの年齢層や職業などの属性については、表1の通りである。

表1 協力者の属性

	年代*	炊き出し時の対応	職業	被災状況
A	60代	炊き出しの中心メンバー	商店経営	店のシャッターが破損
B	70代	参加	主婦	特になし
C	60代	参加	主婦	部屋一部破損
D	60代	参加	主婦	覚えていない
E	60代	参加	主婦	覚えていない
F	60代	参加	主婦	食器破損
G	70代	不参加	商店経営	店の商品破損
H	70代	参加	主婦	食器破損
I	60代	参加	主婦	特になし
J	60代	不参加	主婦	覚えていない
K	60代	参加	会社経営	物件一部破損
L	60代	不参加	主婦	覚えていない

※ 2017年調査時点

これらの証言から肴町婦人会のメンバーは地域に対して愛着があり、「炊き出し」をしたことに対して大きな満足感を得ていることがわかる。婦人会の多くの人々は自分たちの地区に被害がなかったことを申し訳ないと思ひ炊き出しなどを積極的に行った。しかし当初、地域の人々のために行った炊き出しであったが、帰宅困難者の人々への炊き出しが主になった。都市災害では帰宅困難者が多く予想される、このため会社組織は帰宅困難者が増えないような配慮をする必要がある。多くの婦人会のメンバーは自身が高齢であるにもかかわらず、ライフラインの停止した中、必死に炊き出しや近所の身体の不自由な高齢者などに配膳を行った。9割以上のメンバーが、次に災害が起きたときには、経験を生かして、より良い炊き出しをしたいと述べていた。

聞き取り調査をする中で、中心的役割を果たした役員が既に亡くなっていたり、年月が経過して記憶が曖昧で思い出せない人が多くいた。また、6年も経ったことで当時の記録が散逸していることが明らかになった。

7. 地域コミュニティ要因

地域のコミュニティの状況を把握するために地区の地域コミュニティ尺度のレーダーチャートを作成した。このチャートは都市生活研究所が考案した、地域コミュニティの尺度のなかのコミュニティ要因をはかる方法である。地域利便性：交通、商業施設・買い物、公共施設・公共サービス 地域居住性：物価・居住費、自然、治安、医療・福祉 地域資本：人間関係、教育・子育て、将来性、伝統、地域のイメージ これらを5段階評価で表し地域のコミュニティ要因をはかろうとするものである。

図3は、肴町婦人会メンバーの地域コミュニティ尺度の回答の平均点である。震災前と震災後の各項目について比較すると、人間関係や防災を含め、特段に大きな変化は見られない。なお、1点～5点の5段階評価で回答を得ているが、図3においては、2点～4点の目盛りで平均点を図示している。

聞き取り調査においては、震災後に地域から出て行った人々がいるために、人間関係が寂しくなったという意

見は聞かれた。一方、震災で特に何かが大きく変わった訳ではない、との声もあった。震災による建築物の大きな被害などはなかった地域だけに、震災の影響よりも、単に6年の年月を経て町が変わったことの影響の方が大きいようだ。震災の影響を真に捉えるためには、もっと早い時期での調査が必要であった可能性がある。

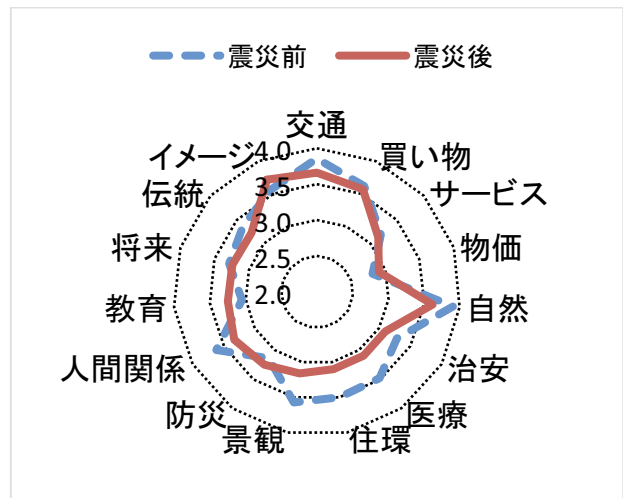


図3 仙台市御譜代町の地域コミュニティ尺度

8. まとめ

震災直後の混乱時に、地域住民による被災者への支援活動がどのように行われたのかを、仙台市御譜代町を例として調査した。地域内の助け合いのつもりが、図らずも帰宅困難者を支援した実態などが明らかになった。

地域住民主体の災害支援活動は重要であり、共助の記憶や記録が、年月とともに消え去るのは大変残念なことである。肴町婦人会の炊き出しの様な地域住民による草の根活動を後世に伝えるために、災害アーカイブ等の活用を図ることが急務である。

謝辞

本調査において多大な協力をして下さいました御譜代商店会、肴町婦人会のみなさまにお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) D. P. アルドリッチ: 災害復興に於けるソーシャル・キャピタルの役割とは何か「地域再生とレジリエンスの構築」ミネルヴァ書房, pp65-72, 2015
- 2) 堀久美: 被災地の女性が担った「炊き出し」の意義と課題: 女性たちへのインタビュー調査より, 女性学研究 23, p84-108, 2016
- 3) 新海英行: 地域のエンパワーメントと住民の主体形成—地域づくりは人づくり—, 名古屋柳城短期大学研究紀要, pp12-13, 2013
- 4) レベッカ・ソルニット: 「災害ユートピア」なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか, 亜紀書房 pp155-157, 2011